

束をしていた。午後にはいつもと同じようにアシスタントの家へ行き、女性たちと過ごす予定だった。しかし約束はかなわず、25日にX校へ通学したのを最後に、私は滞在先を離れ、ニアメ市郊外へ避難をし、8月2日にそのまま国外退避となった。いま、小さな先生たちはどのような日々を過ごしているのだろうか。10月現在、クーデターが収束しておらず、ニアメ市の官庁街における暴動やフランス軍の撤退というニュースが入ってくるが、今日もニジュールでは、子どもたちが

クルアーン学校に通いつづけているにちがいない。

いまでは、ニアメはとても遠い存在となってしまった。ニアメで出会い、一緒にクルアーン学校で学んだ子どもたちに思いをはせながら、私は彼らとふたたび一緒に通学して、ひざを並べて一緒にクルアーンを暗唱する平穏な日々がもどることを強く願っている。

引用文献

UNICEF. 2021. 『世界子供白書2021 統計データ』

トルコのマンガ考

—日本のマンガ受容とイスラームの境界線—

藤本 あずさ*

「一番人気のある日本のマンガはどれですか？」私は書店員に尋ねる。

「どれも全部人気ですよ」20代の女性店員が朗らかに答えた。

「そのなかでも最も売れているのはどれですか？」もう一押しする。

彼女はうーん、としばし頭を悩ませこう続けた。

「強いて言うなら『進撃の巨人』、『鬼滅の刃』、『呪術廻戦』が売れ筋ですね。」

ここはトルコ共和国（以下、トルコ）の都市部イスタンブールのアジア側にある、カドゥキョイという街である。一般的にトルコのアジア側は観光客が多く訪れるヨーロッパ側と比べて敬虔な市民が多い。しかしこのカドゥキョイという場所はやや異質である。街を歩けば至る所で洒落た酒場に出くわすからである。そしてスーパーに行けば冷えたビールがずらりと並んでいる。もっとも、これは日本では当たり前の光景である。しかし、世俗主義とはいえ飲酒をハラームとするイス

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ラームを根幹にする社会のなかで、昼間から大音量の音楽が流れ、ネオンの光が灯る酒場でビールをかつ食らう様子をアジア側で見ると、なかなか不思議な気持ちになる。

冒頭の会話はそのようなカドゥキョイの一角にある書店である。書店とはいっても取り扱うのは主にマンガである。日本の作品以外にも、アメリカや韓国などのマンガも取り扱っている。ほかにもキャラクターのポスターやフィギュア、キーホルダーなどが売られており、いうならばイスタンブール版アニメイトである。ほかの市内の書店においても日本のマンガは必ずといっていいほど販売されている。しかし、カドゥキョイのこの書店は人気作からディープなものや最新作まで豊富に取り揃えている。そのため、日本人のトルコ研究者たちも、その書店で流行りのマンガを購入しては語学の授業で使用したりと、知る人ぞ知る日本人研究者の穴場スポットでもある。

小さくも奥行きのある店内で、日本のマンガは多くの場所を占めている。隅の方にはいわゆるBL¹⁾や百合²⁾のジャンルのマンガもあるから驚きだ。マンガの言語は英訳とトルコ語訳の2種類があり、前者は少し高めの値段設定で、後者は日本とほぼ同じか少し安いぐらいの価格である。英訳で売れたものをトルコ語にも翻訳していると推測できる。イスラームでは忌避されているからか、前述の



写真1 カドゥキョイの某書店の入口

BLや百合のマンガはトルコ語には翻訳されておらず、英訳のみひっそりと置いてある。

トルコ語に翻訳されたマンガコーナーでは、売れ筋の3作品のほかにも、『SPY × FAMILY』、『チェンソーマン』、『東京卍リベンジャーズ』、『約束のネバーランド』などの人気作品も並んでいた。また、今回(2023年)の調査ではトルコ語に訳された『極主夫道』を複数冊その書店で販売していたのが印象的だった。というのも、筆者はトルコで若者が実践する現代的なスーフイズム(イスラーム神秘主義思想)とスピリチュアリティの関係を調査しており、そのなかで偶然にも

1) ボーイズ・ラブ。男性同士の恋愛が題材であるジャンルを指す。トルコ語では“yaoi”と表すこともある。
2) 女性同士の恋愛を扱うジャンルは一般的に「百合」として知られている。トルコ語でも同様に“yuri”と表す。BLに対してGL(ガールズ・ラブ)と称されることもある。この用語が一般化したきっかけは、女性の同性愛者からの投稿を掲載する「百合族」なる雑誌コーナーに由来するとされている。

この書店を知ったのだ。

トルコで人気を得る作品はとある一貫した特徴をもつ。それは、主人公が何らかの道を極めて修行し、過酷で理不尽な環境でも努力し、目標に向かって強い意志で突き進むというストーリーである。心身ともに鍛える、いわゆる修行という概念はスーフイズムにも存在し、親和性が高いといえる。少年マンガの王道ストーリーであるが、過去にトルコで人気のあった作品、たとえば『キャプテン翼』や『DRAGON BALL』、『ONE PIECE』、『NARUTO—ナルト—』といった作品からも、そうした物語展開は多くのファンを獲得するために欠かせない要素であることがわかる。

一方、日本で長らく愛されている作品である『ドラえもん』や『クレヨンしんちゃん』、『ちびまる子ちゃん』そして『サザエさん』といった作品は、トルコの書店ではほぼ見かけない。青少年向けのマンガと比較して、これらの作品がトルコであまり広まらない理由は、時代や読者層の設定とは別に、いくつかの要因が挙げられる。まず『ドラえもん』は、主人公であるのび太が努力や成長をせず、ネコ型ロボットに依存している点が読者にとって魅力的ではないのだろう。『クレヨンしんちゃん』は、男児が下半身を露出するシーンが多く登場するため、受け入れられない可能性が高い。そして『ちびまる子ちゃん』や『サザエさん』のような作品は、ご近所付き合いや小学校での交友関係など、日本社会の日常生活のなかにある微細な皮肉や風刺が、トルコの読者にとって理解しにくいと

推察できる。

さらに、『ゴールデンカムイ』は、日本でアニメ化や実写映画化した人気作であるが、トルコの書店ではあまり売られていない。それは、この作品がアイヌ文化をテーマにしているため、トルコの読者に馴染みのない要素が多いからだと考えられる。また、kamuy（カムイ）はアイヌ語で神格を有する高位の霊的存在を指し、イスラームの神概念と異なる点も馴染みが薄く、あまり関心を引かない可能性がある。同様に、アニメ化・実写化した、中国春秋戦国時代を舞台とする『キングダム』もトルコの書店ではほとんど見かけない。このように、物語自体は少年マンガの王道的な物語展開だとしても、史実に基づく作品はトルコの読者の心にはあまり響かない傾向がある。

加えて、もうひとつの売れない傾向がある作品群は「異世界モノ」および「転生モノ」である。昨今これらの物語は日本で人気を高めており、似たような作風の物語が多く出回っているが、トルコで話題にはならない。この点について、カドゥキョイのモダ（moda：トルコ語で流行の、今時なという意味）なカフェでマンガについてムスリム（イスラーム信徒）の友人と話す。「まあ、イスラームの考えに転生はないからね。」ムスリムにとっては、某作品のような転生したらスライムになっていたなんて展開は絶対にあり得ないのだ。「イスラームには生まれ変わって動物になるっていうのがないんだよ。動物には知識がないとされているから天国も地獄もいかない。人間は正しい行為を選択できる

から動物とは違うっていう考え方なんだ。」
 また、前世に関しても「悪いことが起こるのは前世の行いのせいだ！って思うことで安心できるのはわかるけど、前世の罪で今苦しんでいるなんて信じないよ。前世の罪が今現在に影響している、というのがイスラームの考えと違う。イスラームでは苦しみは神からの試練だから。あと、前世のことなんて覚えていない。覚えてない前世の罪なんて現世には関係ない。というか、そもそもクリスチャン的な原罪という考えがないんだよ」。でも、と彼女は続ける。「アストロロジー界隈の人たちが行っている、前世の問題を解決する前世療法はちょっと気になる。おもしろい」といい、「もちろん信じないけど」と付け加える。「ちなみに、テタヒーラー³⁾の人たちは高次の神的存在をアッラーではなくヤラトゥジュ⁴⁾って呼んでいるよ。でも高次元に上ってヤラトゥジュと話すのは、ムスリムとしては危ないと思う。スピリチュアルな思想は行き過ぎると怖いから、ほどほどに楽しむくらいが一番いいよね」といって、腕につけているパワーストーンを見せてくれた。「パワーストーンは信心深い人もセキユラーな人もつける、モダなものなんだよ」と教えてくれた。

周辺のいくつかの店には、非公式なアニメグッズと一緒に、チャクラ・ブレスレットと

呼ばれる商品が販売されていた。また、これらの店舗ではお香も販売されていた。ブレスレットやお香など、簡単に心理的な安心を提供する商品も、ここ数年で人気を集めている。加えて、書店ではスピリチュアリティに関連する多様な書籍が販売されていた。なかでも有名なものは、願望を「した／なった」と過去形で表現すると実現するという書籍である。トルコで最近注目されているこのアプローチは、どこか日本の言霊信仰と類似している。また、悩みを思い浮かべてページを開くと答えがあるという書籍も販売されていた。これらの商品や思想は、伝統的なイスラームとは異なるものの、トルコの多くの人々に受け入れられている。ただし、同性愛や転生など、イスラームの核となる価値観と一致しない概念は、フィクションであっても不人気である。そこには、一種の目に見えないボーダーラインが存在しているようだ。

以上を踏まえ、トルコで人気のある日本のマンガにおける3つの特徴を整理する。まずひとつは、日本的なシンボルの登場である。刀剣や忍者など、わかりやすい日本的なシンボルは、トルコに限らず海外の読者にとって新鮮に映る。2つめは、文化的・宗教的な許容のボーダーラインを越えないことである。社会通念であるイスラーム観とある程度の整合性がないと幅広いファンをつかめ

3) Theta Healing. トルコ語ではテタヒーリングと発音されることが多いが、一般的にはシータヒーリングと呼ばれる。ホームページによると、シータヒーリングは1995年にヴィアンナ・スティバルによって創設された瞑想手法であり、その手法は脳波をシータ状態に誘導し、「万物の創造主」によって身体的および精神的なヒーリングを実現すると主張している [シータヒーリング 2023].

4) Yaratici. 創造主という意味。

ず、そもそもトルコ語に翻訳されない。3つめは、主人公の成長である。単に平和な日常を描くのではなく、時に挫折しながら、主人公が友人や師と協力して身体的にも精神的にも成長していく過程は、読者に共感呼び起こし、人気を獲得しやすい。こうした性格を

もつ日本のマンガが特に人気を博し、トルコでも多くの人々を楽しませている。

引用文献

シータヒーリング. 2023. <<https://www.thetahealing.com/ja/>>

おしゃべりして待つ

—カメルーン北部ンガウンデレのくらしとウシのこと—

新川まや*

ンガウンデレの街並み

わたしがくらす街の名はンガウンデレという。中部アフリカ、カメルーン的首都ヤウンデから北に電車で半日、カメルーン唯一の鉄道カムレールの終着駅が、ここンガウンデレにある。

街を歩くと、切り落とされたウシの頭や尻尾、内臓が目につく。薄く叩き伸ばされた牛肉や牛皮が道端に干されている。なかなか舗装されない赤土の道に目をやると、ウシの足跡に出くわす。ウシ市か、と畜場か、それとも村へ帰るのか。せわしなく人が行き交う街中を、ウシの群れも堂々と行く。

群れの後ろを、1メートルほどの木の棒 (*sawrou*¹⁾) を手に持った牛飼い (*Gainako*)

の青年が歩いている。ウシを飼養するのは、決まって「村フルベ (*Fulbé laddé*)」あるいは「ボロロ (*Mbororo*)」と他称される人びとだ。村フルベの人びとは、「街フルベ (*Foulbé wouro*)」の人びとからウシを預かり、飼養する。その代わりに、彼らはウシの



写真1 ンガウンデレ駅の前を行くウシの群れ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 文中のフルフルデ語はすべて、カメルーン・ンガウンデレ地域方言で表記。